

斷、其趣達御聽、被仰出相待可申事。

以上

寛文十一年三月十五日

實子一人有之死去仕、其子有之養子に仕度書付上申候所、孫之事候得ば向後御斷不及申上候内御意之旨、御家老衆被仰渡候事。

(寛文十一年) 二月晦日

養子願申衆有之時分、一類に而茂、御鷹師又は御徒等之組に有之人を養子に願申儀、遠慮仕旨に候條、向後左様之組に有之人に而茂、同姓に候者無遠慮可奉願事。右之通頭々可相心得旨、前田佐渡申渡。

(元禄元年) 八月八日

實子・養子之器量并行狀等之様子書付、遺書一所に指出、末期養子之儀は唯今迄書出不申候得共、末期養子之儀者猶更書出可申儀と致齋議候間、他組之者之子弟等に候共、兼

而不存者に候はゞ、召寄候而器量等も見届、行狀之善惡其支配方等に承合候而成とも、存寄之趣實子等之様子書付同事相調、遺書に相添可指出候事。右御用番横山監物申渡。

(享保八年) 癸卯八月廿八日

八 乗物之儀御定

一、自分知三千石以上之面々。附、惣領子一人。

一、御小々姓。

一、十五歳より内之者并病人。

一、出家・儒者・醫師。

一、五十以上之面々。

一、與力又家中病人并五十以上之者、或寄親、或主人より大横目迄可及斷事。

一、十一月・十二月・正月、此三ヶ月將懸乗物惣様御赦免之事。右之外御停止被仰出候也。

寛文元年閏八月十日

御家中乗物御定之趣相違之輩於有之者、爲過料銀一枚出候様に急度可被申渡候。以上。

寛文三年二月十八日

九 衣類之儀御定

御家中侍・下々并町人・百姓衣類之事

一、不依大身小身、紗綾・縞紗・平嶋・羽二重之外唐物、小袖・羽織・袴・上帶・下帶は不及申、襟・袖縁等に至迄一切無用之事。

但、奥嶋・鹿相成毛羽織、爲勝手之能物は各別之事。

一、御昵近之小々姓衣類、法躰人羽織等者、唐物御赦免之事。并家中之小々姓は紗綾・平嶋・鹿相成毛羽織之類、是又御赦免之事。

一、與力・又家中之侍、羽二重・絹之外一切無用。但、主人よりとらせ候物は各別之事。

一、歩行之者・鷹匠并算用之者、絹・袖之外同斷之事。

一、弓・鐵炮之者、袖・木綿之外同斷之事。

一、小者・中間・草履取、木綿・布之外同斷之事。

一、町人絹・袖之外同斷之事。

一、百姓袖・木綿之外同斷之事。

右當亥年より二ヶ年過候はゞ、堅御停止に可被仰付候。兼々被得其意、有來候古衣類は各別、新敷拵不申様に、年中兩度充急度可申觸旨御意候。以上。

(倉治二年) 亥正月朔日

今 枝 民 部

奥 村 河 内

本 多 安 房

長九郎左衛門殿

横山左衛門殿

前田對馬殿

小幡宮内殿

津田玄蕃殿

奥村因幡殿

大身小身并子共御赦免

一、さあや・八丈嶋・ころさい・縮緬・茶字嶋、あるみさいの